

三浦市立名向小学校

研究テーマ：生き生きと学ぶ子～見取りを生かして育む資質・能力～

1 実践の目的

昨今、私たちを取り巻く社会構造や労働環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。そのような中で生き生きと学び、自分で学び続けられることが大切であると考えている。

このような姿を育成するためには、次の3つの資質・能力が必要だと考えている。

- ・見通しをもって主体的に学ぶ力
- ・他者と協働する力
- ・最後まで粘り強くやり遂げる力

本校児童は、課題に対して意欲的に取り組んでいる。一方、教師からの課題を待ってしまうなどの主体性に欠けることがあった。

主体性を発揮するために、一昨年度からズレを生む授業づくりを研究してきた。学習材と自分の経験の違いから生まれる内発的なズレを単元のはじめに、他者と自分の考えの違いから認知する外発的なズレを起こすことを意識した単元づくりを行い、意図的にズレを生み、他者との違いを楽しみながら授業に取り組むことができた。

ズレを生かした授業づくりをするためには、子どもの考えや思いを教師が把握することが必要不可欠であった。そこで、子どもの学びの姿を見取ることが必要だということがわかった。そのことから、見取ることで個への適切なアプローチができ、資質・能力が育成されることが分かった。また、個と個がつながり、新たな考えや学びが生まれると考えている。

個の学びを大切にしたい見取りを生かすこ

とで、上記の3つの資質・能力がよりよく育成され、生き生きと学ぶことができるだろうと考えた。

2 実践の内容

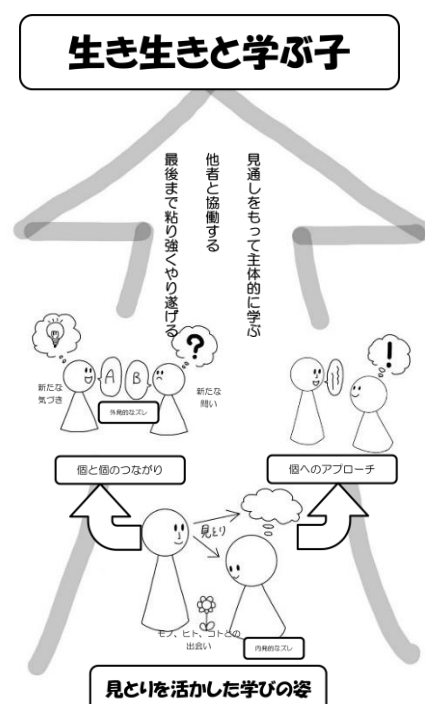
「ズレを生む授業づくり」と「見取りを生かした授業づくり」の2本柱で生き生きと学ぶ子の育成を目指した。

①ズレを生む授業づくり

②見取りを生かした授業づくり

- ・個への適切なアプローチを考える
 - ・個と個をつないで、新たな問いや気づきを生む
- 見取るために以下のことを重点的に行う。
- ・ふり返りや成果物から、個の考えや学びを見取る。
 - ・授業中の学びの様子を見取る。

研究構想図



それらの柱を踏まえて1人1回、研究授業を行った。研究授業の単元を考えるために、従来の単元計画案の要点を記した単元構想シートに変更した。単元の目標、教材の特性、児童の実態から、授業者の願いが一目でわかるような構成を心がけた。また、指導案検討では、授業者の願いに寄り添いながら、単元の目標を達成することができる手立て等を話し合った。

第3学年体育科 単元構想シート		授業日 9月25日(木)
学年	9月 2日 金曜	目標 陸上競技 走速 歩み 走速は自分のペースで 走れるようにすること → 歩幅を揃えて走る
小単元タイトル	小1 ハードル走	
主要な実技	陸上競技 走速 歩み 走速は自分のペースで 走れるようにすること → 歩幅を揃えて走る	陸上競技 走速 歩み 走速は自分のペースで 走れるようにすること → 歩幅を揃えて走る
学習の意図が示し、明確に指導へ取り組むこと、その中で、 1. 歩幅で自分自身をコントロールし、 2. 陸上競技の楽しさを感じること	教材 小1 ハードル走は、インターバル走の基礎 ハードルの高さをとりよめるように → 陸上競技の楽しさを感じること	目的意識 ハードルを越えようという目的を持って学習すること → インターバル走の楽しさを感じ、走速をコントロールし、 走速は自分のペースで走れるようにすること → 歩幅を揃えて走る
学習の意図が示し、明確に指導へ取り組むこと、その中で、 1. 歩幅で自分自身をコントロールし、 2. 陸上競技の楽しさを感じること	学習指導 走速の楽しさを感じ、走速をコントロールし、 走速は自分のペースで走れるようにすること → 歩幅を揃えて走る	学習指導 走速の楽しさを感じ、走速をコントロールし、 走速は自分のペースで走れるようにすること → 歩幅を揃えて走る
評価 観点 環境	評価 観点 環境	評価 観点 環境
見たいポイント	見たいポイント	見たいポイント

研究授業では、今まで授業者が見取ってきた児童の様子を教員と日々共有し、参観者も授業者と同じように児童を見取るようにした。

授業後の研究協議では、参観者が見取った児童の様子を共有し、次の授業での手立てを中心に話し合いをした。協議の最後には、授業者が「次の授業をこうする（ネクストプラン）」ということを参加者に伝え、協議を閉じた。

授業者は児童を中心に授業を考える。参観者は授業者の願いに寄り添う。そのようなことを意識して1年間、研究授業を行った。

3 実践の成果と課題

【成果】

授業者は児童を中心に考えて、単元構想をする。協議に参加する教員（参観者）は授業者の思いに寄り添いながら協議をする。

その結果、授業者も参観者も児童をど真ん中に考えたことになった。単元構想シートにしたことで、授業者は「単元終了後に児童がどうなってほしいのか？」と問いながら、単元を考えることができた。参観者も一目で授業者のねらいが分かった。

児童の学びの様子を中心とした協議の回数を重ねたことで、若手教員の児童の見取りの質が向上したように感じた。児童の細かな仕草をしっかりと見て、それを議論することもあった。教員の見取りの質的向上が最大の成果であった。

【課題】

見とった児童の姿から授業づくりを授業者一人で行っていたことがあった。指導案検討を単元開始前に1度行うのではなく、複数回行っていけると、授業者も参観者も児童の姿から授業をつくっていけるだろう。

また児童を見取る手段を教員間で紹介したり、共有したりする機会が少なかった。今後、授業者や参観者がどの場面でどのように見取っていくのか明確にして、児童の学びの見取りをより充実させていく。

4 今後の展開

児童の表出した姿から、その子が何を考
えているのか？にとどまらず、その子がど
ういう思いを持っているのか？なぜそのよ
うな行動をとったのか？という、教員の解
釈を深くしていきたい。そのために、教員間
の見取りの手立ての共有や、見取ったこと
をどのように授業に生かしていくのか、と
いう話し合いの頻度を増やしていきたい。
そして、それが日常的に自然と職員室で行
われるようになることで、教員の児童を見
取る質がさらに向上し、教員と児童が生き
生きと学ぶ学校を目指していきたい。